江戸時代の最新メディア

浮世絵で学ぶ お江戸子育て

1986年から子ども文化の研究のために、子どもに関連する浮世絵や歴史史料の収集と研究を続けている公文教育研究会。広報部の吉澤 明さんに、浮世絵から読み取れる江戸の子育て事情を教えていただきます。

草双紙（くさぞうし）
渓斎英泉（けいさいえいせん）
天保頃（1830 ― 1844）

渓斎英泉の描いた「草双紙」という子ども浮世絵に当時の親子の読み聞かせの様子が描かれています。

「これも読んで～」と母親にせがむ男の子。髪置き※を終え髪の毛も伸び始めており、歳は４歳頃だろうか。絵のなかには「童部の友としなせる草双紙 これもをとめの手にそなれける」と幼い頃から本に親しませることの大切さが説かれている。母は教えを上手に実践しているのであろう。

※平安時代末期から行われた、幼児が頭髪を剃ることをやめて、伸ばし始める儀式のこと。

さるかに合戦
（赤本／複製）

歴史から見える「絵本」の読み聞かせの魅力

子どもに読み聞かせをしていると子どもの表情は実に豊かになりますよね。登場人物に共感したり、応援したり、同情したり、相手の気持ちを理解する姿を見せてくれることがよくあります。おそらく読み聞かせを通して、言葉を理解しながら、想像力を働かせたり、友だちとの関係づくりで大切な相手を理解し、思いやる気持ちも育まれているのではないでしょうか。そういう意味でも、わが子との読み聞かせを通したコミュニケーションタイムは貴重ですね。

日本ではじめて子ども向けの絵本が出版されたのは江戸時代の中頃と言われています。当時の絵本は赤本と言われ「さるかに合戦」や「舌切雀」「花咲爺」などのおとぎ話や昔話が絵草子屋（えぞうしや）というところで売られていました。

また、18世紀の後半には既に絵本の読み聞かせの大切さが儒学者・江村北海の著書『授業編』のなかで説かれました。その内容を分かりやすく要約すると〝たまには旅さきで絵草子を土産にして、子どもに与えなさい。子どもは本の中の絵を見ていると、そのうちに「読んで～」とせがむようになるから、その時を見逃さずに読み聞かせてあげなさい〟という意味のことを推奨していたのです。

日本の
伝統的な子育て事情を
お伝えすることで
現代の子育てを応援します

KUMON
×
Happy-Note

江戸ミニ知識

日本のおとぎ話の絵本が海を渡る

ちりめん本
桃太郎
（英語版）

ちりめん本
かちかち山
（スペイン語版）

明治 18 年（1885）頃から、出版業者であった長谷川武次郎によって着物の手触り感のある「ちりめん本」が在日外国人向けに販売されました。その中身はなんと英語、フランス語、ドイツ語、ポルトガル語、スペイン語などに翻訳された桃太郎やかちかち山、舌切雀などのおとぎ話や昔話。このちりめん本は在日外国人に大変喜ばれ、日本の子ども文化が土産物として海を渡り欧米諸国に広がりました。翻訳にはヘボン式ローマ字の発案者であるJ・ヘボンやラフカディオ・ハーン（小泉八雲）のような著名人も携わっていたのです。

ここで紹介した作品は Web サイト「くもん子ども浮世絵ミュージアム」https://www.kumon-ukiyoe.jp でもご覧いただけます。

【写真提供●公文教育研究会】